

オルタナ日本 下

日本存亡を賭けて

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

繪・挿画 安田忠幸

目次

第九章	奥州平泉	9
第十章	農業用ドローン	34
第十一章	第五航空艦隊	62
第十二章	D素粒子	87
第十三章	再会	113
第十四章	覚醒	139
第十五章	記憶	161
第十六章	別れと旅立ち	183
エピローグ		197

登場人物紹介

日本

〔陸軍〕

どもんこうへい
土門康平 陸軍中將。特殊作戦群群長。

〔原田小隊〕

はらただたくみ
原田拓海 陸軍少佐。軍医。東京ERで研修中だったが、インターン生活を終えて第四〇三本部管理中隊A小隊小隊長に復帰した。

はたけともゆき
畑友之 元兵曹長。人生の大半を軍で過ごし、陸軍を辞めて地元に戻る。今は広域消防団の分隊長。コードネーム：ファーム。

たかやまけん
高山健 コードネーム：ヘルステア。

おおしろまさひこ
大城雅彦 コードネーム：キャッスル。

まちだ はるお
待田晴郎 兵曹長。コードネーム：ガル。

たぐちしんた
田口芯太 一等水兵。コードネーム：リザード。

ひがひろみ
比嘉博実 一等水兵。コードネーム：ヤンバル。

あづまだい き
吾妻大樹 コードネーム：アイガー。

〔姜小隊〕

かんあやか
姜彩夏 陸軍少佐。土門の副官。

うるしぼらたけとみ
漆原武富 コードネーム：バレル。

ふくとめだん
福留弾 兵曹長。コードネーム：チェスト。

い い かける
井伊翔 コードネーム：リベット。

みずの ともお
水野智雄 兵曹長。コードネーム：フィッシュ。

み どうそう ま
御堂走馬 コードネーム：シューズ。

あねこう じ さねあつ
姉小路実篤 コードネーム：ポーンズ。

かわにし まさふみ
川西雅文 コードネーム：キック。

ゆ ら しん じ
由良慎司 コードネーム：ベビーフェイス。

あ び る あきら
阿比留憲 コードネーム：ダック。

あかばねたく き
赤羽拓真 コードネーム：シェフ。

〔陸軍東京衛生学校〕

し ぼ ひかる
司馬光 陸軍心理戦研究班班長。

〈空軍〉

佐原幸司 空軍長官。

〔第五航空艦隊〕

岩切仁史 海軍少将。第五航空艦隊司令官。

〈西方航空方面団〉

碧葉傑 空軍中将。防空作戦の指揮をとる。

久利須冴子 空軍少将。参謀長。

神隼斗 空軍中佐。飛行第五〇戦隊隊長。コールサイン：ホーク。

〈海軍〉

郷原智 海軍中将。連合艦隊司令長官。

淵田祐太郎 海軍大佐。艦隊航空参謀。

相田真理子 海軍大佐。艦隊作戦参謀。

堀田輝正 大佐。`加賀、艦長。

《警視庁》

小辻守雄 警視正。警視庁、特殊公安係参与。初老の男で近寄りかた
い殺気が溢れている。

〔`響、リニア・コライダー研究所〕

名越堅太郎 `響、リニア・コライダー研究所所長。

〔東京大学カブリ数物連携宇宙研究機構〕

羅門正宗 准教授。専門は宇宙物理学全般。

日影宗貞 理論物理学博士。`進化限界説、を提唱した。

井口 莊 司 元岐阜県警刑事。日影の元で生活している一人。

香葉 日影の世話をしていた、施設の古株。

平 憲 弘 元伍長。今は広域消防団の団員。畑友之と同じ時期に陸軍
を辞めて地元である平泉に戻った。

中国

《人民解放軍》

〈空軍〉

黄 宏 大 空軍少将。

〈海軍〉

ツァイトン
蔡通 海軍中将。東海艦隊司令官。

ハンチン
韓芹 海軍少将。

〈陸軍〉

チエンシン
銭星 陸軍少将。空挺部隊の指揮をとる。ロシア軍とともに人民解放軍を率いて日本に降りた。

ファンクアンイン
方冠英 陸軍少将。

チウワイチ
邱一智 陸軍大佐。参謀長。

トゥトン
杜桐 中尉。旅団本部付き偵察小隊を指揮する。

レイホン
雷弘 人民解放軍・陸軍中佐。日本での肩書きは小さな貿易会社の専務。

リュウイシン
盧立新 少佐。雷弘の部下。日本の肩書きは係長。

コンヨンコ
孔永革 精華大学教授で理論物理学者。スタンフォード大学国立加速器研究所で日影宗貞と一緒に研究していた。孔娜娜の父親。

ウジュンリー
呉正麗 博士。孔永革博士の妻。

コン ナ ナ 茂のきだ もえ
孔娜娜（榎田萌） 孔永革の娘。“ヴォイド”から突然現れた。この世界の命運を握る女性。

/// ロシア ///

〈空軍〉

エフゲニー・キム 空軍少将。中国空軍のカウンターパート。

〈陸軍〉

ユーリ・ガガーノフ 陸軍少将。ロシア軍を率いて日本に降りる。

アレクセイ・ボロディン 大佐。第45独立親衛特殊任務連隊、スペツナズ部隊の指揮をとる。

オルタナ日本
下 日本存亡を賭けて

一九八九年、中曾根^{なかそね}政権は、悲願の自主憲法制定を成し遂げた。
そのことによつて、日本は、もう一つの歴史を歩みはじめる――。

第九章 奥州平泉

世界は、シンクと呼ばれる奇妙な現象に襲おそわれていた。

それはある日、突然出現し、周囲のあらゆる物体、空気、水、光子までをも飲み込み、現れた時と同じようにふいに消えていく。

水中、地中、空中と、出現する高度も選ばず、規模も様々だったが、最初南米に発生したこの現象は徐々に北半球へと広がり、規模も巨大化しているようだった。

地球は今、このシンクに飲み込まれ、文明社会は潰えようとしていたのだ。

東京の奥多摩おくたまでも中規模のシンクが発生し、雲くも

取山とりやまで被害が出ていた。人的被害は無かったが、南に位置する山梨県大月市おおつきの廃校では、別の騒動が発生していた。

シンクが収まった途端、物理学者を誘拐ゆうかいして立て籠もった人民解放軍と、陸軍の間に戦闘が発生するが、人民解放軍は制圧され、いったん事は収まったかにみえた。ところが、そこに新たなシンクが発生した。

その場にいた全員が死を覚悟したが、だがそれはシンクではなかった。シンクに似た真つ黒な球体ではあったが、何も飲み込まず、逆に一人の女性を吐き出して消えたのだ。

その女性は、しばらくは自分の名前以外、何一つ思い出せなかった。だが、この場にいた中国人物理学者の娘で、人質奪還作戦を指揮していた日本陸軍少佐の妻だと言った。二人の男の顔だけは覚えていたようだ。

状況は、あまりにも複雑怪奇だった。

雲取山に発生したシンクは、気圧の急激な低下を招き、付近は高度八〇〇メートルとほぼ同じ気圧になった。それは気温の低下も招いて、学校と集落を隔てる溪谷の小川は、今もまだ凍りついたらまだだった。

地上の気温は戻りつつあったが、強風がまだ吹いている。路上に放置された多くの車両が吹き飛ばされ、何台かはシンクに吸い込まれたものと思われた。

人民解放軍がここに来たのは、日本人のある天才物理学者を誘拐し、自国が誇る天才物理学者に

会わせるためだった。

その二人——日影宗貞博士ひかげむねさだと孔永革博士コンヨンコは親子ほども年が離れていたが、素粒子論と宇宙物理学の俊英しゅんえいとして、シンクが出現するまで、廃校となった小学校の教室で熱く語り合っていた。

信州の山奥で仲間とともに世捨て人として暮らしていた日影は、すでに全てを諦めていた。人類に何かができるとは露ほども思っていなかったが、孔博士は最後の瞬間まで諦めるつもりはなかった。孔博士と娘の孔娜娜ナナは、廃校の校庭で感動の再会を果たした。

そこには投降した人民解放軍兵士と、陸軍特殊作戦群の兵士、日影の隠遁生活いんとんの仲間に、日本側を代表して二人の研究に立ち会っていた東京大学カブリ数物連携宇宙研究機構の羅門正宗准教授もいた。

全員が、親子の再会に呆然としていた。なぜな

らその娘は、ずっと前に交通事故で亡くなったと聞かされていたからだ。

やがて集落の公民館に指揮所を開いていた陸軍と警視庁特殊公安係の幹部らが、ワゴン車に乗って駆けつけた。突然現れたシンクが一瞬にして消え去ったことで、何が起こったのか説明しろと迫ってきたのだ。

「いったい何が起こったんだ？」

陸軍特殊作戦群群長の土門康平どもんこうへい中將が、羅門に質した。

羅門は両手を広げて「さあ、われわれもさっぱりで」と応じた。

親子は今、早口の北京語で会話している。それを理解できる日本人は、土門一人だった。土門は北京語で孔博士に尋ねた。

「孔博士、あなたのお嬢様は十数年前、沖縄おきなわで事故死しているはずですが」

「ああ、そうなんだ將軍！　ところが、娘がいた世界では、どうやらわれわれが死んで娘が生き残ったらしい」

孔博士は、娘の顔を眩しそうに見つめながら言った。

「娘がいた世界とは、どういう意味ですか」

「別の次元の別の宇宙という意味だ。安っぽい言葉で言えば、平行へいワールドせということになる」

「そんな、馬鹿な——」

「馬鹿げていてもいいさ。こうして再会できた」

娘は軽い目眩めまいが続いているようで、時々よろけそうになっていた。

「教室に入って、座ろうか」

「ええと……これは何とか言う症状で、確か、断裂だん記憶障害。私が名付けたんだわ……」

娘は、突然今度は流ちょうな日本語で喋り始め

た。

「あなたは、どうして日本語を話せるんだ」

「どうして、かしら……。思い出せない。とにかく私は空間というか、壁を越えてきたわけで、そうすると、その副作用で、しばらく記憶が飛んだり混乱したりするんです。私はその症状を研究している。でも医者じゃなくて、物理学者のはず。ねえ、ダーリン」

そう言いながら、コマンド部隊の小隊長であり軍医でもある原田拓海少佐を見つめた。

「ダーリン？ 説明しろ、少佐」と土門が表情を強ばらせた。

「彼女はそう言うのですが、自分には何とも……」

「いったん落ち着きましょう」

ここで羅門が提案した。副官の姜彩夏少佐も「將軍、響の問題に対処しません」と進言し

た。

「ああ、そうだった。響が占領されつつある。人民解放軍がロシア空軍の輸送編隊で押しかけ、空挺降下してきた。われわれがここにはどうにもならん。しばらくは現地部隊に任せるしかないだろう。俺の勘だが、おそらくこちらの方が優先だ。博士は政府や軍から、何か聞いていませんか」

土門は再び北京語で孔博士に質した。

「ヒビキで？ まさか。何をすればいいのかもわからないのに、粒子加速器を乗っ取っても無意味だ。だが、そうだな……初期にそういう話を党の幹部にした記憶はある。何か解決策が見つかるしたら、鍵は粒子加速器だろうとは伝えたよ。連中はあんな話を真に受けたのか……。国連なり、日本の科学技術省なりに要請すれば済む話なのに」

「とにかく皆さん、お嬢様はお疲れのようだし、椅子がある場所に移動しましょう。教室内は安全なはずですよ」

「いいだろう。後始末は地元部隊と警視庁に任せよう」

二人の天才が滞在していた教室は窓ガラスが全て無くなっていったが、ガラスの破片はひとかけらも残っていない。持ち込まれたホワイトボードも、一台を除き全てシンクに吸い出されていた。数式がびっしりと書き込まれたホワイトボードの中央に、古びた写真がマグネットで止めてあった。それだけはなぜか残っていた。

孔博士は、娘をそのホワイトボードの前に連れていった。

「覚えているかい？ この写真を撮った日のことを」

「確か、沖縄の水族館で撮った写真でしょう？」

この夜、事故が起こった」

「ああ、そうだ。私は最愛の娘を失った」

「私は……良く覚えていないわ。あの後、何があったのか」

土門は教卓の上に肘を突いて「羅門先生、説明してくれないか。いったい何が起きているんだね」と尋ねた。

「乱暴な説明になりますが、彼女は、平行世界からきた人間で、彼女が元いた世界では孔博士は亡くなっている。そして向こうの世界で彼女は原田少佐と結婚していたということでしょう」

「その平行世界とやらは、マンデラ病で言う、盗まれた中国」のことなのかね」

「その可能性は低いでしょうね。彼女が何かの高度技術でこちら側に来たとすれば、技術力はわれわれより半世紀近くは進んでいる。盗まれた中国は、別に科学技術が進んでいるわけではあり

ません。単に世界情勢が違うというだけです」

「では、この世界を救えるのか?」

「そうであることを願いますが、彼女はまだ記憶が混乱しているようだ」

羅門は話が弾んでいる親子の背後に近寄ると「申し訳ないですが、さつきメモのようなものを手にしてましたよね」と彼女に聞く。

「ああ、そうだったわ!」

娜娜はすぐにジーンズのポケットに手を入れると、メモの束を取り出した。五枚ほどあり、裏表にびっしりと文字が書き込まれている。それは日本語で、数式だらけのメモもあった。頁ナンバ―も振ってある。彼女は一枚目を読み上げた。

「ええと……私の日本名は、^{えのきだもえ}榎田萌で、これは養子として迎えてくれた親切な父親の姓です。私は天才物理学者で……これ、自分で書いたのかしら? 恥ずかしいわ。これを読んでいるあなた、

つまり私は、ヴォイドで時空を超えたことで酷い断裂記憶障害に陥っている。あなたの記憶は混乱し、自分が何者かとも思い出せないはずだが、それは時間が解決する。いずれ記憶は再統合される。数日かかるかもしれない。そして、あなたは世界を救いにきたのではない。おそらくは救えない。最愛の夫と最後の瞬間を過ごすために来た。原田拓海を探せ。彼は、どの宇宙でも軍人のはずだ」

そこで彼女は、ふと何かに気づいたように視線を上げた。

「へえ、パパがこの世界で生きていることは想定外だったんだ。でも、量子もつれのおかげね。ダーリンの元にジャンプした」

「つまり、あなたの世界は平行世界を往き来する技術力があり、あなたはどこかの宇宙で原田少佐と結婚していたが何らかの事情で離ればなれになった?」

「そういうことね。でも愛していたことだけはしっかり覚えてる！」

榎田萌は、困惑する原田に満面の笑顔を注ぎながら喋った。

「あなたのことはどう呼べばいいですか。孔博士？ それとも榎田博士？」

「どちらでもいいけど」

「そのメモを拝借してもよろしいですか。あなたの記憶を回復する手助けができるかもしれない。……この数式は、ちよつと私には理解できませんが」

「副官！ これをスマホで写メして、拡大プリントしてこい。ただし、最高機密だ。誰にも知られてはならん。必ず君自身の手でプリントしろ。この情報はまだ特高にも渡せない。それでよろしいですか？」

土門は特殊公安の小辻守雄おつじもりお警視正にも念押しし

た。

「……われわれが手にしても、情報を照会する先は同じでしょう」

姜少佐がメモ用紙を机の上に並べ、スマホで撮りはじめた。

萌はホワイトボードに近寄ると、マジックを持つてある数式に否定の横線を引いた。

「パパ、この理論はすでに否定されました。それと、この n 乗は間違いね。こっちの定数 3×2 乗は、 3 乗の間違いだと最近わかりました。遅れているわね。私たちの世界より全然遅れている……。あと、これはT対称性はもたない。この演算子は全部でたらめね」

「お前は私より頭がいいのか」と父が尋ねた。

「パパとママの遺伝子を掛け合わせたのよ。天才なのは当たり前でしょう！ でもまだ自分がどういう天才なのかわからないけれどね。ああ、お水

をもらえますか。ヅォイドズォイドを超えると、体力を消耗しょうこうするの」

「ヅォイドズォイド? あれはヅォイドズォイドという現象で、人工的なものなのですか」

そう羅門が聞いた。

「らしいわね」

「不思議だ。私もあれを見た瞬間、あれはシンクではなく、ヅォイドズォイドという現象だと閃ひらめいた」

「……自分もそうです。あれはシンクではなくヅォイドズォイドだと思った」

同じく原田が言った。

「そう、シンク! シンクよ! 向こうでもシンクが発生して、地球が滅亡しかけている。原因は何だったかしら。……思い出せない」

「ガル、司馬大佐しばを至急連れてこい! 彼女の専門だ。一分でも早く彼女に記憶を取り戻してもらわなきゃならん」

土門は原田の部下に命じた。

人質として連れてこられた日影博士の農場メンバーである香菜かなが、全員分のコーヒーを運んできた。土門は教壇でそれを立ったまま飲んだが、他の面子は椅子に座りコーヒーを味わった。

「それで皆さん、ご意見は」

土門は英語で全員に問いかけた。孔博士は娘が書いた数式のメモにずっと見入っていて、時々、首を傾げながらノートにメモを取っていた。

「ソウスケ、これは、あれじゃないかね?」

数式のある部分を指さして、メモを日影博士に手渡した。

「……ああ、これは明らかにM理論ですね。面白い、非常に面白い」

滅多に感情を顔に出さない日影が、呻くように言った。

「日影博士、それは私が聞いても理解不能なお話

「でしような」

土門が日影に尋ねた。

「こういうのは、僕より羅門先生の方が説明は得意だ」と日影が羅門に振った。

「M理論というのは、われわれの世界ではもっとも新しくホットな宇宙論です。既存の宇宙論をだぶ逸脱しているもので、多数派の同意を得ているわけではありません。言ってみれば、インフレーション理論の先にあるというか」

「ああ、それ古典宇宙論ね。私の世界では、もう教科書にも載っていません」

萌はあっさりと否定した。

「じゃあ、ビッグバンも……」

「ビッグバウンズ理論に取って変わりました。だから私が今ここにいます」

「ではこれは、M理論下で起こった現象なのか」

孔博士が北京語で娘に聞いた。

「さあ……。そこに私が何か書いたのなら、そういうことなのかも」

娘は英語で答えた。

「驚いたな。われわれはやっとインフレーション理論を観測結果で証明しつつあるというのに」

「孔博士、あなたのお嬢さんは、われわれの世界を救えますか」

そう土門が聞いた。

「致死的な新しい感染症の特効薬になるかもしれない薬が見つかったとして、それは安全性も確認されていないし、そもそも特効薬かどうかもわからない。將軍は使いますか？ 自分や、自分の家族に」

「それが致死率一〇〇パーセントの感染症だとしたら、迷う理由はないでしょう。悪化する前に使います」

「他に手が無い状況では、私は娘の才能にかけ

る」

「……日影博士のご意見は？」

「どう考えても、われわれの世界の物理学は彼女がいた世界と比べて、ひいき目にも四半世紀は遅れている。彼女自身が救えないと判断しているのであれば、ここでわれわれが過去のものになった理論で彼女に協力したとしても、われわれにできることは無いと思いますね。それぞれ家族の元に帰り、最後の瞬間を静かに迎えた方がいい」

「彼女の協力を得ることで、何かの弊害へいがいはありますか」

「いいえ。われわれは、言ってみればスペイン人と出会ってしまったインカ帝国のようなものです。害があるも何も、われわれに為す術は無い。もし孔博士が同意してくださるなら、ぜひ僕の農場に招待し、しばらく議論したい。最新の宇宙論をぜひ拝聴したいな」

土門はわかったと頷いた。

「羅門先生、あなたに決めてほしい。日影先生や親子をカブリ研に同行し、向こうの天才グループと意見交換してもらおうというのが無難だろうが」

「それは勧めませんね。船頭多くして船山に登るの状況に陥ることは避けられない。それに、彼女が平行世界からきたという情報はあつという間に漏れて、世界中に拡散することでしょう。孔博士が娘さんを失った事実は、科学者ならみんな知っていますからね。いらぬ混乱と希望を与え、民衆を失望させることになります。僕に一任していただけるのであれば、日影博士のファームに移動するとう選択肢は有りだと思えます。いずれにしても、ここは復旧は無理でしょうから」

シンクが電信柱を浚さらつていったため、一帯はずっと停電したままだ。

「了解した。へりを用意させます。日影博士の農

場に皆さんをお連れして、必要な物資の援助と警備を手配しましょう」

「ダーリンも一緒にいいかしら」と、萌は強い調子でアピールした。

「あなたの精神衛生に貢献するなら許可しましょう。ただし、彼は兵士です。いざという時は出勤させますよ」

「將軍、もう一つ不躰ぶしつけなお願いだが、日影博士を誘拐してここに連れてきた情報部の士官も同行させたい。もちろん、君たちの保護下のままで構わない。あの中佐は、マンデラ病で盗まれた中国[〃]を記憶しているし、北京政府と接触する秘密のルートももっているはずだ。いざという時に役に立ってくれる」

孔博士が提案してきた。

「わかりました。一緒に行動させるわけにはいきませんが、おそらく農場の近くに支援本部を立ち

上げることになるでしょうから、そこで待機させます。彼らの尋問と監禁は特高に委ねましょう。それでいいかな、警視正」

「ありがたいご提案です。SWATは犠牲を払った。引き続き作戦に参加させていただけると、連中の不満も少しは和らぐでしょう」

小辻警視正が頷いた。

ガルこと待田晴郎まちだはるお兵曹長が、陸軍心理戦研究班班長の司馬光ひかる大佐を連れて戻ってきた。司馬は精神科医ではないが、心理学者としてそれに近いことをしていた。司馬は榎田萌と会うなり「あなた、マンデラ病って聞いたことあります」と聞いた。

「マンデラ病？ ネルソン・マンデラと関係がありますか？」

「そこから由来した病名です」

「ああ、マンデラ効果のことね。彼が南アフリカ

の大統領にならずに獄中死ごくちゆうしした世界線のことでしょう」

「こちらの世界では、獄中死しました。 دونالد・トランプはアメリカの大統領にはならなかったし、イギリスはEU離脱なんて選択しなかった。仮にあなたもマンデラ病だとすると、断裂記憶障害でしたっけ」

「ええ、そう呼んでいるみたいですね。他人事みたいなの言いますが」

「それがこちらのマンデラ病と似ているとして、唯一の治療法は、おそらく睡眠です。睡眠を重ねるごとに混乱した世界の記憶は薄れ、正常に戻っていく。つまり放っておくしかないってことね。睡眠導入剤を飲んで、四時間眠ることを提案します」

土門は司馬、原田、待田の三人に廊下に出るよう命じた。四人で隣の空き教室に入る。

「俺は響こずの事案に対処しなきゃならん。基本的には現地師団が動くことになるが、相手が空挺となると、反撃と掃討はうちが対処することになるだろう。東シナ海でも派手におっぱじまったようだが、向こうは空海軍の話でしかも圧倒的に日本が優勢な戦いらしいから、心配はいらんだろう。それでまず、日影博士の農場にみんなで移動してもらおうとして、しばらくは現場の指揮は司馬さんに委ねたいが」

「あたし？ 冗談はよしてよ。机上演習も参加したことないのに」

「大丈夫ですよ。補給の面倒を見るだけです。飯を何人分確保するとか、簡易ベッドやテントの用意とか。警備は、どうせ警察が仕切りたがります。その程度の雑用はやらせとかなないと、あいつらはいっ爆発するかもわからん。それで原田君には、一応、現地に向かってもらうが——」

「ここで原田が「いや自分は」と遮った。

「將軍。自分は、彼女の結婚相手ではありません。結婚していたのは平行世界の別の自分であつて、自分にとっては全く知らない女性です」

原田が抗議するような口調で言つた。

「そうかもしれないが、彼女がそばにいてほしいというなら覚えてあるふりでもしとけ。害はないだろう。べっぴんさんだしな。だが、響で奪還作戦がはじまるようなら駆けつけてもらうぞ。ガルはしばらく司馬さんを助けて向こうの状況を整えさせろ。万一に備えて訓練小隊を向かわせるから、それと入れ替わりでいったん習志野ならしのに帰るつもりでいろ。松本から出張でつてくる現地部隊は自由に使つていい」

「万事了解です」と待田が頷く。

「この校庭、C Hの着陸は無理だろうな。校舎の屋上は強度が足らなさそうだし……」

「橋の上がいいでしょう。橋の上でホバリングさせて、タラップだけを校庭に降ろして乗り込んでもらいます」

待田がそう提案した。

「任せる。俺は副官が戻ってくるのを待つて、習志野いちがなり市ヶ谷やなりへと汎用ヘリで引き揚げる。後は君らでよろしくやってくれ」

「それで、彼女はこの世界を救えるのかしら」

司馬が一番肝心なことを土門に聞いた。

「さあ。無駄なあがきで終わらないことを祈るしかないね。どうなるにせよ、わが国領土内で、国の科学研究拠点が敵に占領されるということは見過ごせない。これから国が滅ぶということなど関係ない。奴らを殲滅せんめつしなきゃならん。いざとなれば、核を北京ペキンとモスクワに撃ち込んででも奴らを黙らせることになる。そういう事態を避けたいなら、彼女を一刻も早く正常に戻してくれ」

姜少佐が戻ってきたので、土門はコピーの束を羅門に手渡し、一部だけ自分用に確保して迎えるのMH2000B汎用ヘリで廢校を後にした。

そこに残された研究者集団と捕虜となった解放軍情報部の将校らを運ぶため、二機の大型ヘリC H-47Jが飛来し収容した。

上空に舞い上がったヘリの後部ランプドアの間から地上を見下ろした原田は息を飲んだ。どこも禿げ山になり、枯れ木一本残っていない。何もかもシンクに吸い込まれていたのだ。これで人的被害が出なかったとしたら奇跡だと思った。

何か、シンクに追われているような気がしていた。ここに来る前には、南鳥島みなみとりしまでマンデラ病の発症者を確保して島を飛び立った途端、巨大なシンクが現れ輸送機もろとも吸い込まれそうになった。

そして今度はこれだ。悪夢を見ているような気

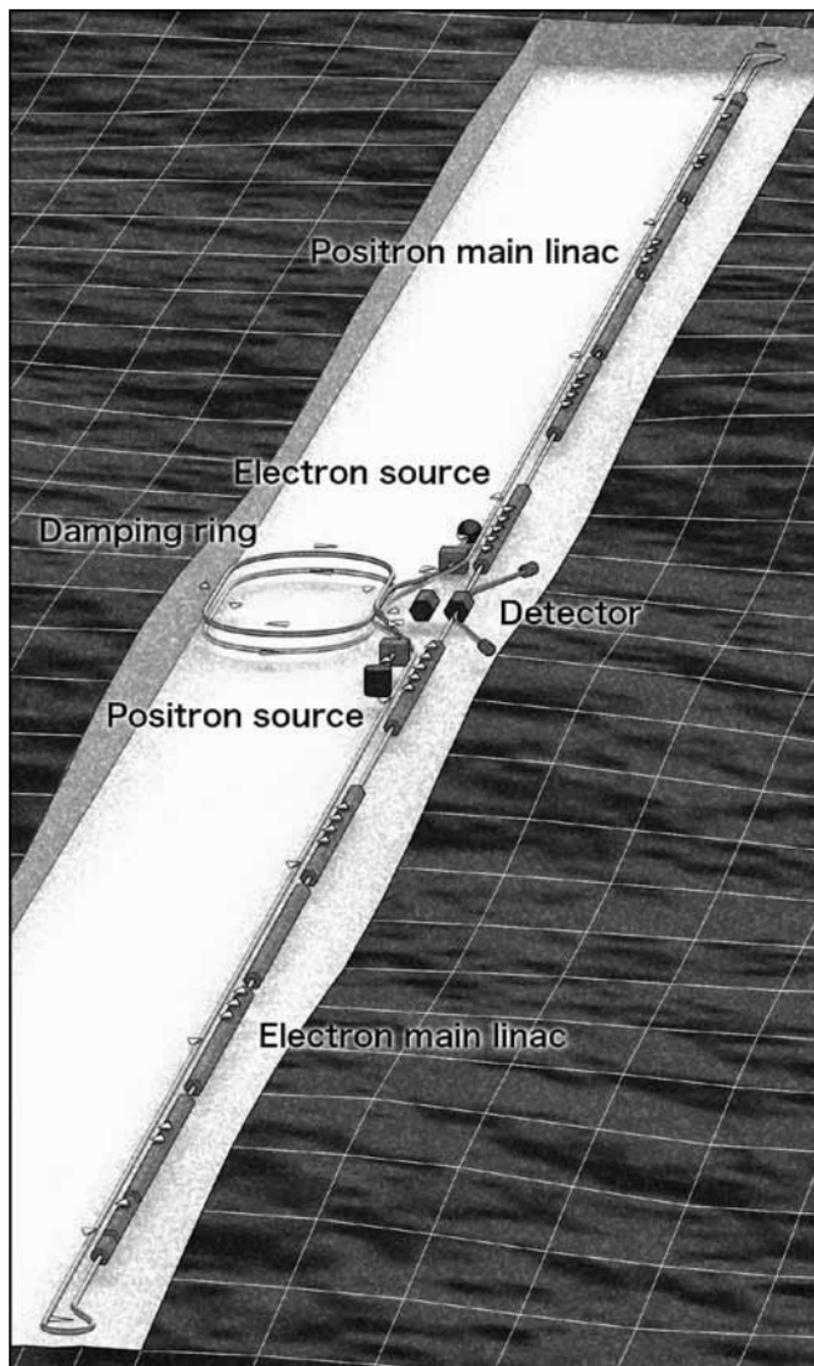
がした。

北上山地の南端、平泉市ひらいずみの東部山岳地帯に、巨大な学園都市が建設されていた。

そこには、研究施設以外何も無かった。ただの山の中にある辺鄙へんびな場所で、世間からは第二の筑波学園都市と呼ばれている。近くをリニア新幹線が通つてはいるがあまりに不便なので、最寄り駅から ترامを引く計画が進められていた。

地元としては鉄道を引いてもらいたかったようだが、鉄道は研究装置に微妙な震動を与えるということで却下されたのだ。 ترامですら最初は嫌がったほどで、この装置はそれほどに繊細なものだった。

世界最大規模、全長五〇キロもある国際リニア・コライダーLCD響びの装置が、北上山地の花崗岩かこうがん



の岩盤をくりぬいて設置されている。建設費は年々高騰し、最終的に七兆円にもなったが、日本が費用の七割を出して完成させた。管理は国際学術団体だが、実質的には日本が運営していることは言うまでもない。

ここでは常時、博士号をもつ一〇〇〇人ももの科学者たちが集い、世界最先端の素粒子実験が繰り広げられていた。

日本は世界最大のニュートリノ実験装置、*ハーパー・カミオカンデ*に、大型低温重力波望遠鏡 *スーパーKAGRA*、そしてこの響で量子論科学の最先端を走っていた。世界中の研究者が、こぞって日本を目指した。

研究者が *ココア*、あるいは本部管理棟と呼んでいる施設の制御室・研究・管理棟は、五〇キロあるリニア・コライダーのほぼ中央付近に建設されていた。

地上五階地下七階建ての建物は、遠目には高校か大学の校舎にしか見えない。特に際立ったデザインでもなく、至って普通の長方形の建物だ。高騰する建設費に対する世論を宥めるため、わざと質素な外観にしたという噂だった。

他の研究施設と違うところは、震動を防ぐために駐車場は建物から一キロ以上離れていることだ。従って本部管理棟の周囲はただの荒地地というか、芝生だった。

半径一キロが、震動制限区域に設定されているため、研究者も施設を管理する民間人も、駐車場からは専用のシャトルバスで往き来する。

兵士が空挺降下するには絶好の場所だ。地面には何の突起物もなく、一個師団でも易々と降りられそうな広々とした空間で、山岳地帯ではあるが、そこだけ昔から開墾されていた。

ロシア軍を率いるユーリ・ガガーノフ陸軍少将

と、人民解放軍を率いて降りてきた。銭星陸軍少将は、管理棟の正面玄関前で落ち合った。

そこは、今は騒がしかった。制御用ロケット付き大型パラシュートで降ろされた装甲車や四輪駆動車が走り回っている。全部隊が配置につくには、おそらく三〇分ほどはかかるだろう。

ロシア軍はあくまでもオプザーバーという位置付けで、ほんの一個中隊と航空機、車両を提供しただけだ。解放軍は一個空挺師団が降下していた。すでに建物は占拠した。施設に武装警備員がいないことは事前にわかっていた。

「空気が澄んでいる。綺麗だ……」

銭將軍がロシア語でそう言った。「うちの訓練場と変わらん。高度も高いわけじゃない」

ガガーノフは左腕に巻いた太い気圧高度計を見た。高度は一三〇メートルと出ている。GPSで

は一二五メートルと出ている。

「まあ、今時の中国よりは綺麗な空気であることは認めるよ」

第45独立親衛特殊任務連隊、スペツナズ部隊の指揮をとるアレクセイ・ボロディン大佐が建物から出てきて、中に入るよう言った。

吹き抜けの玄関ホールは、コンサートでも開けそうなほど広い。その中央に、台座に載ったガラスケースが置かれている。金箔を貼られた古めかしい建物の模型が中に納められていた。上の階から両翼に広がる螺旋階段がある。

兵士に連れられたロシア人男性がホールの奥から現れた。白髪で銀縁眼鏡をかけているが、汚れた作業着姿だった。

「エフゲニー・ウリヤノフ博士？」

「そうだが、いったいこれは何の騒動だね」

「博士の協力が必要になる。モスクワから指令は

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。